

『檻の中の暴君』

著：神香うらら

ill：こうじま奈月

「このままでいいと思ってるの？ あんただって、兄ちゃんと地塩がつき合うの反対してただろ!？」

————赤坂の高級焼肉店の個室。焼肉を食べながら熱弁を振るう真子人を、向かいの席の椋代がうるさそうに見やる。

「いいも悪いも、親父さんが認めたんだ。俺が口を挟むことじゃない」

「跡取りとかはどーすんだよ？」

「会社は別に世(せ)襲(しゅう)制(せい)ではないからな。まあいずれ坊ちゃんが社長になるだろうが、その後のことは坊ちゃんが考えればいいことだ」

「……薄情だな」

椋代のことは苦手だが、一応兄と地塩の交際に反対している者同士、仲間だと思っていた。

椋代が反対しないのなら、反対派は真子人だけになってしまう。

「いい加減諦めろ。あの二人、見ただろ？ 本人たちが満足してんだから、それでいいじゃねえか」

「……………」

箸(はし)を止めて、真子人は椋代の三(さん)白(ぱく)眼(がん)を睨(にら)みつけた。

————それはわかってる。

誰よりも兄の幸せを願っているからこそ、兄が今、地塩と結ばれて幸せを嚙(か)み締めていることは知っている。

けれど、兄が男と……しかも年下で元ヤクザの跡取りで生意気で横暴な男とつき合うことに、諸(もろ)手(て)を拳(あ)げて賛成するわけにはいかない。

「おまえは大好きな兄貴を取られて悔(く)や)しいんだろうが……」

「そうじゃなくて！ 俺はただ、兄ちゃんには本当に幸せになって欲しいと思って……っ」

「そういうことは由多佳さんと直接話し合え」

ノンアルコールのビールを飲みながら、椋代が面倒くさそうに手を振る。この話はこれで終わりだというように突き放されて、真子人は唇を尖らせた。

(……ちえ。みんなして俺のことわからず屋扱いしやがって)

本当はわかっている。椋代や友人たちの言うとおりののだと。

————今の自分は、最愛の兄を取られてふて腐(くさ)れている子供だ。

そんな自分自身に腹が立って、真子人はぷうっとむくれて焼肉を口に運んだ。

椋代も黙って網の上に肉を置いて焼いてくれる。

しばし、個室が沈黙に包まれる。隣の部屋から賑(にぎ)やかな笑い声が聞こえて、真子人は改めて椋代と二人きりであることを意識してしまった。

(……ま、地塩のためなんだろーけど、こいつもよく俺なんかにつき合ってくれるよなあ……)

向かいの席の棕代をしげしげと観察する。

——初対面の印象は最悪だった。

由多佳が地塩の家で初めて家庭教師をした日、どうしてもアパートまで送ると言い張った地塩とともにやってきたのが、棕代だった。

切れ長の目と高い鼻(び)梁(りょう)、大きな口。やや面(おも)長(なが)の、男っぽくて整った顔立ち。黒々した髪をきっちりと撫でつけ、高そうなスーツを隙(すき)なく着こなし、一見エリートサラリーマンのようだが……三白眼と薄い唇が、酷薄(こはく)そうな印象を与えている。

(うーん……やっぱちょっとヤクザっぽいかなあ。地塩が“動”なら棕代さんは“静”って感じだけど、時々妙に迫力あるし)

地塩も百八十五センチくらいあってかなりの長身だが、棕代はそれよりも更に何センチか大きい。龍門邸の滞在中に着流し姿を見たことがあるが、ちらりと覗く胸板や腕もがっしりしていて逞(たくま)しかった。

普通に生活していたら、まず知り合う機会のない男だ。

黒っぽいスーツをびしりと着こなした強(こわ)面(もて)の棕代と、赤い髪にシルバーのアクセサリーの、いかにも今どきの若者の真子人との間には、共通点が何もない。こうして一緒に焼肉を食べているのが、なんだか不思議に思えてくる。

「こっち、焼けてるぞ」

真子人の手が止まっていることに気づいたのか、棕代が顔を上げる。

「……………ああ」

「野菜も食え」

取り皿に勝手に野菜を載(の)せられて、真子人は目を剥いた。

「あっ、ちょっ、俺(俺)椎(しい)茸(たけ)苦手(苦手)だって言ったじゃん！」

「椎茸(しいたけ)じゃない。これは新種(しんしゅ)の茸(きのこ)だ」

「うそ！ 騙(だま)されねーぞ」

「騙(だま)されたと思って食ってみろ。ここのは格別(かくべつ)美味(うまい)いぞ」

いつの間にか、いつもどおりの会話になっていた。

棕代とのこうした軽口(けいこう)の応(おう)酬(しゅう)は嫌いではない。根(ね)が素直(すじく)な真子人は、さっきまでぷりぷりしていたことも忘れて皿(しら)に載(の)せられた椎茸(しいたけ)を口(くち)に入(い)れた。

「うう……やっぱり椎茸(しいたけ)の味がする……」

「気のせいだ」

「うー……」

涙目(なみ)で椎茸(しいたけ)を飲み込む真子人(まこ)を見て、棕代(すげ)がにやりと笑(わ)う。

「勇(ゆう)太(た)が(た)がおまえの椎茸(しいたけ)嫌い(嫌い)を克服(こくふく)させようと燃(も)えてるぞ。今度(こんど)、椎茸(しいたけ)フルコース(コース)を作るって張り切(はりき)ってる」

「ええーっ、勘弁(かんべん)してよ」

勇太(ゆうた)というのは、龍門邸(りゅうもんてい)で家事(かじ)全般(ぜんぱん)を任(まか)されている元組員(もとのぐみん)だ。二十二歳(にじふにさい)と年齢(ねんれい)も近く、人懐(ひと)こい性格(せいかく)なので、屋敷(やしき)に匿(かく)われている間に真子人(まこ)もすっかり打ち解(うち)けた。今(いま)ではメール(メール)をやり取り(やりとり)したり、龍門邸(りゅうもんてい)に泊(と)まるときは対戦(たいせん)ゲーム(ゲーム)で遊(あそ)んだりする仲(なつ)である。

「だけどおまえ、こないだ勇太(ゆうた)が作ったハンバーグ(ハンバーグ)美味(うまい)美味(うまい)ってぺろ(ぺろ)っと平(ひら)げただろ。あれ、椎茸(しいたけ)入(い)ってたぞ」

「……まじ!? うっそ、まじで!？」

目を丸くすると、椋代が堪(こら)えきれなくなったように声を上げて笑った。

(あ、笑った)

皮肉っぽい笑みや嘲(ちょう)笑(しょう)はしょっちゅうのことだが、声を上げて笑うところは初めて見た。

「……………」

笑うと目尻に皺(しわ)ができて、それがやけに色っぽくて……思わず真子人は、口をぽかんと半開きにしたまま椋代に見とれてしまった。

本文 p22～28 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>